The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	A Corpus-based Analysis of the Concept of ANGER within Conceptual Metaphor Theory
Author(s)	南澤, 佑樹
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/69280
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　南澤　佑樹　　）	
論文題名	A Corpus-based Analysis of the Concept of ANGER within Conceptual Metaphor Theory (概念メタファー理論における怒りの概念に関する分析：コーパス分析の観点から)

論文内容の要旨

本論文では、概念メタファー理論（以後CMT）に基づき、怒りの感情についてコーパスを用いて分析を行った。本論文で扱った問題は次の３点である。

1. 怒りを表す中心的なメタファー・メトニミーは何か？（第４章）
2. 怒りを表す類義語の間で結びつきの強いメタファー・メトニミーは異なるのか？（第５章）
3. 概念メタファーANGER IS A HOT FLUID IN A CONTAINERに関して、2つの類似した言語の間ではどのような類似点、相違点が見られるのか？（第６章）

まず第２章では、以上の問題に関する議論の前提として、概念メタファー理論、および概念メタファー理論における感情概念に関する先行研究を概観した。CMTにしたがえば、メタファーは単なる言葉の綾ではなく人間の思考と深く結びついており、私たちは、目に見えないような抽象的な概念をより具体的な概念を通して理解している。そのような抽象的な概念の典型的な一例が感情概念であり、LakoffやKövecsesらの研究によれば、私たちは、怒りや恐怖といった感情を様々なメタファー、メトニミーを通して理解している。

続いて第３章では、本研究における感情のメタファー分析の手法について議論を行った。概念メタファーに関する従来の研究の多くは内省データに基づいており、主にコーパス言語学者からその分析法に関して批判が行われてきた。近年、メタファー分析に対してもコーパスの有用性が指摘され、それにともないコーパスを用いた分析法がいくつか提案されている。その一つとして、Stefanowitsch (2004, 2006b)によって提案されたメタファーパタン分析が挙げられる。Stefanowitschによれば、メタファーパタンは根源領域に属する語と目標領域に属する語が共起する表現と定義される。例えば、boiling with angerという表現は、根源領域に属するboilingと目標領域に属するangerが共起するメタファーパタンである。Stefanowitschは、このようなメタファーパタンを分析対象とすることでコーパスデータに基づいて目標領域（本研究における感情）志向的なメタファー分析が可能となると述べており、本研究もこのメタファーパタンに基づいて行った。さらに、メトニミー表現の収集にも同様の手法を用いた。

しかしKövecses (2011)などの主張によれば、コーパスを用いた分析ではメタファーの中心性を頻度データに基づいて決定する場合が多いことから、boiling with angerのような具体的なメタファー (specific-level metaphor)よりもin angerやhave angerといったより一般的なメタファー (generic-level metaphor)を中心的とみなす傾向がある。これに対してKövecsesは、抽象的な概念の理解により貢献するのは一般的なメタファーではなくむしろ具体的なレベルのメタファーであると批判を行っている。

このことから本研究では、メタファーパタンを一種のコロケーションとみなし、コロケーションを測る統計手法を用いてメタファーの中心性の決定を試みた。本論文では意味的に結びつきの強いコロケーションを抽出するMIスコアを用いた。概念メタファー理論に基づけば、感情と意味的に結びつきの強い共起語には、メタファーやメトニミーに関連する語が多いと想定される。

以上の議論をふまえ第４章では、怒りを表す中心的なメタファーの問題について議論を行った。怒りを含めた感情概念に最も貢献するメタファーは何かという問題は、これまでの感情のメタファー研究の中でも多くの議論が行われてきた。一例を挙げるとKövecses (2000) は、怒りに対して用いられる主要なメタファーとしてANGRE IS A HOT FLUID IN A CONTAINERやANGER IS FIREなど12種類を挙げ、その中でもANGER IS A HOT FLUID IN A CONTAINERを最も中心的なメタファーとしている。

しかしながら、以上のような主要なメタファーがどのように決定されるのかに関しては、これまでに十分な議論がなされてるとは言えない。したがって本章では、怒りの概念化により貢献度の高い中心的なメタファー、メトニミー

を先に言及したMIスコアによって決定する手法を提案した。コーパスはBritish National Corpus（以後BNC）を用い、検索語はanger、rageとした。検索語をanger、rageとしたのは、Lakoff (1987)やKövecses (1990)においてangerやrageといった語を含む表現が怒りのメタファーの分析に用いられているからである。なお、メタファーの中心性を決定する際には以下の基準にしたがった。

1. MIスコアのリストでより上位にくる共起語が属するメタファーをより中心的とする。
2. 有意な共起語（MIスコア３以上）をより多く有するメタファーをより中心的とする。
3. 怒りの感情のより多くの側面を表すメタファーをより中心的とする。

以上の方法で調査を行った結果、リストの上位には怒りを表すメタファー・メトニミーに関連する共起語が数多く見られた。まず第一の基準に関しては、特にseetheやsimmering、well、bubbleのようにANGER IS A HOT FLUID IN A CONTAINERに属する共起語が上位に数多く見られた。このことから、怒りの感情はANGER IS A HOT FLUID IN A CONTAINERと結びつきが強いと言える。その他、ANGER IS A DANGEROUS ANIMAL (howl、bristle)、ANGER IS FIRE (incandescent、searing)、ANGER IS A NATURAL FORCE (surge、subside)のようなメタファーもリストの上位に現れた。MIスコアで有意とみなされた共起語を分類した結果もこの結果と並行しており、ANGER IS A HOT FLUID IN A CONTAINERに属する共起語が最も多く、またANGER IS A DANGEROUS ANIMAL、ANGER IS FIRE、ANGER IS A NATURAL FORCEに属する共起語も見られた。さらに第三の基準に関して、メタファー的に怒りを表す有意な共起語をKövecsesの提案する怒りの認知モデルの側面ごとに分類を行った結果、ANGER IS A HOT FLUID IN A CONTAINERが感情の最も多くの側面に対応していた。

以上の結果を考慮に入れると、本調査において、怒りを表す最も中心的なメタファーはANGER IS A HOT FLUID IN A CONTAINERである。また、怒りを表す主要なメタファーとしてKövecses (2000)は合計12種類を挙げているが、本調査の結果をふまえると、怒りを表す主要なメタファーはANGER IS A HOT FLUID IN A CONTAINER、ANGER IS A DANGEROUS ANIMAL、ANGER IS FIRE、ANGER IS A NATURAL FORCEの４種類である。さらにANGER IS A NATURAL FORCEに属する共起語が潮の干満や波に関するものであることから、怒りを表すのに用いられる要素は主に液体（Fluid)、動物（Animal）、火（Fire）の３種類であると考えられる。

怒りを表すメトニミーに関しては、従来恐怖を表すメトニミーとして取り上げられていたSCREAMING FOR THE EMOTION (scream with rage)やINABILITY TO SPEAK FOR THE EMOTION (speechless with anger)といったメトニミーが怒りにも用いられることが確認された。

第４章ではanger、rageを同一感情ANGERとして扱ったが、第５章では、angerとrageを区別して調査を行った。従来は、LakoffやKövecsesらの研究にも見られる様にangerやrageで表される感情を同一感情として分析することが多く、類義語におけるメタファー、メトニミーの違いに関してはあまり関心が向けられてこなかった。しかしながら、近年コーパスを用いた手法でデータを量的に分析することが可能となったことにより、類義語間に見られる共通性や違いに注目することができるようになった。怒りの感情に関しても鈴木（2010)やTurkkila (2014)など類義語の違いに注目した研究がいくつか存在するが、分析対象とされているメタファーが限定されているなどの問題も見られる。

これをふまえ本章では、前章と同様の手法を用いて怒りを表す類義語anger、rageとそれぞれ結びつきの強い共起語を抽出した。その結果、angerとrageの間にはメタファー・メトニミーの結びつきに関していくつかの相違点が見られた。まず、angerに関しては、リストの上位にvent、seethe、well、simmeringといった語が見られ、前章の結果と並行する結果が得られた。それに対してrageでは、むしろhowlやbristle、murderous といったANGER IS A DANGEROUS ANIMALに分類される共起語がリストの上位に見られた。この結果は、rageはangerと比べてよりANGER IS A DANGEROUS ANIMALとの結びつきが強いことを示唆している。また有意な共起語をメタファーごとに分類した結果、anger、rageともにANGER IS A HOT FLUID IN A CONTAINERに属する共起語が最も多かったものの、rageでは、angerよりもANGER IS A DANGEROUS ANIMALに属する共起語の割合が高かった。これらの結果から、rageはangerよりもANGER IS A DANGEROUS ANIMALとの結びつきがより強いと言える。さらに、以上の結論はメトニミーの観点からも支持される。angerでは様々なメトニミーが見られたのに対し、rageではANGER IS A DANGEROUS ANIMALに基盤を与えていると考えられるSCREAMING/CRYING FOR ANGERに属する共起語の割合が高かった。

第６章では、怒りにおける最も中心的なメタファーであるANGER IS A HOT FLUID IN A CONTAINERに関して、英語とノルウェー語の間で比較を行った。近年、感情のメタファーに関しても様々な言語で研究が行われるようになり、怒りのメタファーに関しても日本語や中国語など異なる言語でANGER IS A HOT FLUID IN A CONTAINERと同様のメタファーが確認されている。しかしながらこれまで英語と類似した言語との比較はあまり行われておらず、ノルウェー語に関しても怒りのメタファーに関する分析はほとんどなされていない。

そこで本章では、ANGER IS A HOT FLUID IN A CONTAINERに属するメタファー表現を収集し、英語とノルウェー語で比較を行った。本調査では、検索語と結びつきの強い共起語のみを抽出するMIスコアの手法ではなく、無作為に1,000例をコーパスより抽出し、そこから手作業でメタファーの認定を行った。

その結果、英語とノルウェー語ではANGER IS A HOT FLUID IN A CONTAINERに関していくつかの共通点が見られた。まずfylleとfill、sydeとseethe、eksplodereとexplodeなど、ノルウェー語と英語の間で同語源の語を用いた直接対応するメタファー表現が見られた。また、英語に関して挙げられていた様々なメタファー表現が、ノルウェー語においても数多く見られた。それに対して、ノルウェー語と英語の間には相違点も見られた。ANGER IS A HOT FLUID IN A CONTAINERでは、怒りのコントロールは怒りを体外に出すことに対応する（ANGER CAN BE LET OUT UNDER CONTROL）。しかし、これには液体を体外に放出するタイプと蒸気を放出するタイプの２種類が確認される。前者のタイプの場合、英語ではdrain、ノルウェー語ではutløp（‘outlet’）などが用いられ、後者の場合には英語ではvent、ノルウェー語ではlufte（‘ventilate’）といった語が用いられる。本調査では英語、ノルウェー語ともに両方のタイプが確認されたが、英語では、後者の蒸気を放出するタイプの表現が多く見られたのに対し、ノルウェー語では、液体を放出するタイプの表現が多く見られた。

最後に第７章では本論文の主張を確認した。本論文での主張は以下の様にまとめられる。

1. 概念メタファー・メトニミーの中心性を測るにはMIスコアが有効な手法となりうる。
2. 怒りの主要なメタファーはANGER IS A HOT FLUID IN A CONTAINER、ANGER IS A DANGEROUS ANIMAL、ANGER IS FIRE、ANGER IS A NATURAL FORCEの４種類であり、その中で最も中心的なのはANGER IS A HOT FLUID IN A CONTAINERである。また、怒りは主に液体、動物、火を通して概念化される。
3. 怒りは様々な概念メトニミーと強く結びつく。本研究では、先行研究において恐怖のメトニミーとして挙げられていたものの多くが怒りにも同様に確認された。
4. angerとrageは概ね同様のメタファーと結びつくが、rageは、angerよりもANGER IS A DANGEROUS ANIMALとの結びつきが強い。メトニミー的に怒りを表す共起語のデータもこれを支持する。
5. ノルウェー語にもANGER IS A HOT FLUID IN A CONTAINERと同様のメタファーが存在する。英語とノルウェー語は類似点も多いが相違点も見られる。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　南澤　佑樹　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	井元　秀剛
	副 査	准教授	早瀬　尚子
	副 査	教授	岩根　久

論文審査の結果の要旨

南澤氏の博士論文*A Corpus-based Analysis of the Concept of ANGER within Conceptual Metaphor Theory*は、コーパス分析をベースとして「怒り」を表す概念メタファーの中心的メタファーの確定、同義語angerとrageの違い、さらに英語とノルウェー語を比較した意欲的な論文である。

本論文は7章構成となっており、第1章で本論文の目的と構成を示した後、第2章で概念メタファー理論の紹介、第3章でコーパス分析の意義を論じている。そのうえで4章以下が具体的な分析と考察で、4章は「怒り」に関する中心的メタファーは何であるかという問題、5章は類義語angerとrageはどう異なるかという問題、6章は中心的概念メタファーと認められたANGER IS A HOT FLUID IN A CONTAINERに関して英語とノルウェー語に違いはないかという問題を扱っている。最後の7章は結論で、本論文のまとめと成果、今後に向けた課題が示されている。

南澤氏によれば、Kövecsesなどによってなされてきたメタファー研究は内省的考察によるもので、そこであげられた中心的メタファーがなぜ中心と言えるのか、という客観的根拠が示されていなかったという問題点があるという。そこでメタファーパターンを一種のコロケーションとみなし、MIスコアーを求めて以下の3つの尺度に基づいて中心を決定するという基準を提案する。(1)MIスコアーで上位にくる共起語が属するメタファーをより中心的とする。(2)有意な共起語(MI≧3)をより多く有するメタファーをより中心的とする。(3)怒りの感情のより多くの側面を表すメタファーをより中心的とする。その結果、Kövecsesがあげる中心的メタファーはおおむね正しいものの、Kövecsesが合計12種類のメタファーをあげるのに対し4種類で十分であるという修正も施している。さらに、これまでangerとrageは類義語としてその違いが問題にされることはなかったが、共起語のリストを調べることで、rageにおいてもANGER IS A HOT FLUID IN A CONTAINERが中心であることはかわらないが、angerに比べてANGER IS A DANGEROUS ANIMALと結びつく頻度が相対的に高く、angerよりも激しい怒りの感情を表すという違いを見いだしている。6章では、異なる言語間の比較で、これまでの対照研究は主に英語と日本語や中国語などの系統の異なる言語間で行われてきたが、系統の近い言語間の比較は見過ごされてきたという観点から英語とノルウェー語の比較をおこなっている。ノルウェー語の場合、どのようなメタファーがあるかという事例の抽出から始めなくてはならず、MIスコアではなく、単純な頻度を用いてまずメタファーを抽出し、そのうえで英語と比較している。その結果、怒りのコントロールは怒りを体外に出すことに対応するが、英語では蒸気を放出するタイプが多く見られたのに対し、ノルウェー語では液体を放出するタイプが多かったと指摘している。

このように、従来言われてきたことを客観的なデータに基づいて検証し、類義語間の違いなどを見いだした功績は大きい。審査の過程で、なぜ英語とノルウェー語なのか、また、なぜノルウェー語との比較でMIスコアを用いなかったのかという理由、さらにメトニミーが本当にこの手法で抽出できるのか、といった問題が指摘されたが、現在取得できるコーパスという物理的手段の限界を考慮するならある程度やむをえないともいえるものである。

以上により、本論文を博士(言語文化学)の学位論文として価値あるものと認める。

なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを終えていることを申し添えます。